

ったが、又、いつの日か、気持の上でも、はっきり「山」を求める時まで、「山」は一時忘れよう。私は何故かこの牢名主と呼ばれる人の言葉に素直にうなずいていた。根が単純なせいもあるのかもしれないが……………。

時に彼は又、淋しがり屋のロマンチストでもある。雨が降ったり、雪山の吹雪の停滞の時など彼の木層節や刈干切歌が、我々の気持をなごませてくれたものだった。

そして又、かわいい子供の写真をサイフに入れて見せてくれる、親バカぶりも時には発揮する。

小生にとって、いや我々仲間にとって、この「牢名主」ほど頼りがいのある、恐しい人間はいない様だ。

小生自身にとっても学生時代から、社会人になってからも、「山」を通して、人間としての生き方、考え方を、これほど強烈に教えていただいた人は、かつてなかった様に思う。

私の青春時代を通じて、いつまでも、忘れ得ぬ人として、仲間と共に、いつまでも心に残しておきたい人でもある。

小野竜弥、技研の「牢名主」の今後のますますの御活躍を祈るとともに、今後共、御協力、御指導を願ってやまない考えです。

己がかってな文になり、まことに恐縮するところではありますが、先輩として、後輩の乱文乱筆をお許し願います。

2 回想の黒部

「その一」

永 森 洋 一・小 野 龍 弥

通いなれた峠も、いつもながらに苦しかったが、ひとり峠を登ってきた少女が、山の名を尋ね、手帳にスケッチを頼まれた。写真をとってもらったお礼に、水晶岳の水晶をさし出すと、ヤッホー、と峠を下っていった。

二度のアタックを天候のため果たしえなかった上ノ廊下は遠く赤牛の下を流れている。三度目の正直という言葉がある。今度はぜひとも征服してやる

と意気揚々と峠を下る。 N

黒部の水は美しい、蒼く透明な流れの底に、宝石を敷きつめたようだ。

左岸ゆきづまり右岸へこすところ、約30米の渡渉は雨も手伝って胸までつかりながら、やっと思いでこす。

みるみる水かさがまして、露出していた水中の岩がかくれ、水は泥色となる。底をさらってゆく本流の色だ。濁流に響音をとどろかせて、たぎりおちてゆく。

眠りの枕に流音ますます激し、黒部は怒りを解き給へ

右岸へ胸までの深さで渡渉、全身しびれて、まるで真冬の水に飛び込んだようだ。 N

口元のタル沢上手をタル沢側への渡渉は首までつかって必死の渡渉をする。全身がぬれてふるえがとまらぬ哀れな姿だ、タル沢はまだ陽がささず、樹の間からもれてくる約一坪の陽だまりに、三人が暖を求める。

廊下沢は岩の積み重なりの上を水が落ちるやゝ大きな沢、あの開けたあたりが廊下乗越であろうか、空が蒼い。

左へ折れるあたり宙天高く、間の山をへだてゝ、偉大なエネルギーを思わせて、薬師はそびえる。

数合沢出合まで兩岸共明るく開けて爽快なところ、出合やゝ下流の砂地に幕営しようと今日最後の渡渉、急流を胸まで浸るのは最後といえどつらい業だ。

夕飼の仕度の済む頃、陽はようやく落ちて静かな溪の夜が訪れそめる。あの暗い廊下とこの明るい河原、それら陰陽をまとめて、黒部の豪快な流れは、尽きるところを知らない。

奥の廊下の突破こそ最後にして最大の課題。この水量ではトロの部分の乗越は可能かどうか、だがこの雄大な大自然にきて寸時のことを思うまい。自然は永遠のもの吾らの意志ある限り山はにげてゆきはしないのだ、眠る。

私は破れ去った、強烈な黒部の自然に立ち向うに私は弱すぎたのだ。

深々とした水を眼前にして、さらに予想される廊下の中のトロと激流を思

うとき、私は負けたと感じた。長い年月求めてきたものゝ、私の力では打ち克てない威力が僅か六米の水を越えさせなかった。どのくらいの時間この大岩に立っていたことだろう。飛び込もうとする心と負けたと思う心との相克が、この六米の距離にあった。

小野氏はその丸い岩の上に立ったまゝ上流を見つめている。果してゆけるだろうか。無理かも知れぬ、あの岩までは行けるだろう。しかし…… N
長い沈黙の後、小野氏が戻ってくる。返事はわかっていた。 N

二人の若い友人は黙って私を見る、彼等は何も言わず碇に腰を下ろす。

見上げる黒部は秋の色を表わしていた、深い谷に木の葉が散り、冷たい風が吹いていた、それが心にさみしさを与え黒部のきびしさを感じさせた。 N
行きつまったところで深いトロを七米ばかり浅瀬目指して泳ぐ、いくら手足を動かしても下流へ流される力が強い、気の遠くなりそうな冷たさの中を死にものぐるいで泳ぐ。

もなく平凡な谷を進むと、水も消えかける頃、前方七米をへだてゝかなり大きな熊とばったり出合い、一声唸りを立てたかと思うとブッシュの中に逃げこんでいった。いつまでもザワザワとブッシュの動く音がする。彼は野苺を食べていたらしい。そこには赤い苺が残されていた。

富山の灯を眼下に見ながら、生涯忘れたい日だったと思う、星にむかって誓う、私はへこたれはしない。挑戦するのだ、上ノ廊下へ。

薬師沢出合は森林におゝわれて暗いが、流れそのものはあの豪快さをなくして、穏やかに滑ってゆく、やはり豪快な黒部にこそ、私の思いが燃えるのだと考える。

深い樹木に密雲が走り、じっとりと葉末をぬらす源流を溯る。

源流一帯は木々が赤く染め始め秋らしくなっている。 N

どうどうと流れは走る、谷と人とが一体となり、時のたつのを忘れて飛石を続ける。谷歩きを知るものゝ味わいであろう。

吾々は鷲羽乗越へと登る、あの豪快そして長大な黒部も、今や一条の水と化して、黒部の旅は終り、追憶は限りなく脳裏をよぎる、一沫の無念さは残

るが、それ故にこそ黒部は今も私のライフワークとして偉大な存在なのだ、黒部こそ私の山である。

早や秋の気配が山にひっそりとしのび込み、すれちがう山ゆく人もどこか淋しげだ。

「その二」 小野 竜 弥 ・ 古 谷 精 宏

去年の二倍量はある針の木峠への雪を辿る。これで峠は九回目だ。

雪渓とお花畑とはい松の中のザラ場に天幕を張ればこゝはもう吾々だけの別天地だ。

さあこの夢のようなキャンプの夜をじっとかみしめよう。

いよいよ廊下沢に向って下る。数合の頭の向うに、薬師がカールをみせて黒部にすべりこみ、その左には雲の平の上に、黒部五郎がそして赤牛が、口元のタル沢の上部を雲に隠してならび立っている。さらに頭を左にめぐらせば、木挽山の美しいカーブがぐっと迫り、これらの山々がモルゲンロートに色彩られている。その下に黒部はまだ眠っているのであろうかその姿を見えない。

赤牛岳の濃密な森林が眼前に拡がっている。黒部に一步一步近づく、この爽快さはたとえるべきものがない。

去年砂地で快適だったキャンプサイトは岩と石との河原になっている。自然の驚異というべきか。

去年泳いで必死だったところは、すね位で渡れるこの水量を前にして、なぜか哀しいのだ。

流木を拾い集めてファイヤをたく、同じみの顔の四人が、今夜もまたその親しみを深めてゆくだろう。

今日が去年の計画を中断しなければならなかった核心部の溯行だ。思えば悩み苦しんだ365日であった。その勝敗が今日一日で決するといっても言いすぎでない。 F

わらじをはき、三ツ道具にゼルブスト、赤い細引に白いナイロンザイル、

これらに加えてカメラまで、順序正しく身にまといつけ、いよいよ溯行がはじまる。

両岸はまったく衝立を立てたようだ、その向うでは流れが落差を見せており、左岸よりには白い岩が見える。核心部のトロである。

この間約五十米だった、確保していると、皆んな悲愴ながんばりを見せてやってくる。

さしもの上ノ黒ピンカもその怒りを解いて、川はぐっと明るくなってくる。

ずぶぬれの体はいよいよ極限に達して、ふるえが止らず、闘志が消えてしまいそうだ、仕方なくザックを下ろして、冷たいジュースと、チーズとクラッカーをほおばる。今日は雲の多い日で少し陽が差したかと思うとすぐかげってしまうので、皆んな空ばかりながめている。ようやく体のぬくみを取り戻して立上ると、すぐに渡渉ということになる。

金作谷の段丘が現れる。むしろ嬉しくなってくる。皆んな奇声を発してにこにここと、今までの寒さなんか忘れたような顔をしている。

あの壁、あの流れ、あの寒さ、そしていつもの仲間たち、ついに核心部を溯行しえたのだ。

さあ友よ火をかこもう、この満ちたりた夜をさらに豪華な思い出としよう。それはそうとして、この煙むったさはたまらんわい。

ザックはロープでつないで水に浮べて引っばる。ブカリブカリとやってくる姿つい軍艦マーチが口をつく。

この岩小屋はとおく黒部のパイオニア時代から、親しまれてきたものだ、吾々も同じ屋根の下に泊ることが楽しくてならない。

岩小屋について程なく雨がふってくる。吾々は岩小屋の奥へと押しこめられ、身うごきできぬ状態で仮眠す。 F

荷を下ろして互の健闘をたゝえ合う、全て吾々の踏跡でつぶられたわけだ。

「ゴツアンデ、」この一言が吾々の溯行の代償と言えるたった一つの尊い清らかな代償であった。

上ノ廊下よ、僕はいつまでも君との闘いを忘れないだろう。僕は君のあら

ゆるとうせんぼを突破してきた。けれども振り返ってみる君の姿は、やはり今もって厳しいものにしか見えない。

「その三」

和田 徳之

私が黒部川に立った気持ちをどの様に表現していいのかそれはこれからやろうとしていることに対する、恐れであったかもしれないし、憧れに似た楽しさであったかも知れない。

この様な複雑な気持ちも、上ノ廊下への第一歩を踏み出すと、たゞ前進するのみの意気込みで、良い渡渉点を探すことであり、冷たい流れの中で両足をしっかりと支え対岸へ渡っていくことの連続である。

水だけとってみれば何の変哲もないものだが、遠く数キロに及ぶ廊下を通ってくる水は、いくつもの表情をもっている。

あるときはやさしい表情、こんな時は自分自身冷たさも苦にならず楽しみながら行けるのである。あるときは全く恐しい表情、こんな時は全く足もとにも及ばない感じを与える。こんな表情にも挑戦しなければならない。ザイルをはって挑戦するのである。

岩をへつっているその下をトロとなって流れる水、激しい水しぶきを上げながら落ちる水、浅瀬を滑ってゆく水、これらの水が心の中に様々な変化を生むのだ。

こうして水と戦い、自分自身とも戦わねばならなかった、このようにして上ノ廊下は終わった。